

狛江の地蔵信仰 I

平成14年3月29日発行

狛江市和泉本町1-1-5

電話 (3430) 1111

狛江にある6カ寺の境内や墓地、あるいは辻などには、古い石造の地蔵にまじって、近年造立された地蔵像も少なからずみられます。なかでも、昭和・平成にかけて造られた水子地蔵が目をはびます（円住院・慶岸寺・千手院）。また、まわり地蔵で知られる延命子安地蔵尊を本堂にまつる泉龍寺境内には、この地蔵像を何倍かに模したという大きな坐像の石仏が、造られています（昭和57年）。昭和40年代から平成の初めに、六地蔵を造立したところもあります（明静院・円住院・千手院）。一方、辻など路傍にまつる地蔵尊のなかには、道路拡幅整備によって遷座したものもみられますが、工事の際に破損したり、心ない者に持ち去られたりした像もあったそうです。

ここでは、江戸時代に造立され、狛江の人々の暮らしの中に、その信仰が息づいてきた、いくつかの地蔵尊とその習俗をとりあげてみました。なお、江戸時代から近郷近在に知られた、泉龍寺のまわり地蔵（延命子安地蔵）については、すでに文化財ノート4でとりあげていますので、除いてあります。

I 泉龍寺の耳切り地蔵—狛江最古の地蔵像

元和泉の泉龍寺別院（平成6年建立）の入口近くに、石造丸彫り立像の地蔵尊が安置されています。耳の損傷から、耳切り地蔵とか耳なし地蔵などとよばれてきた地蔵像で、右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、像高は113cmほど。現存する狛江の地蔵像の中では最も古く、背面の銘文から、明暦3年（1657）10月8日、檀那の菩提のために、龍法寺の西源（二世住僧）が造立したものと知られます。龍法寺（龍宝寺、隆法寺とも）は、江戸時代に、いまの別院のあたりにあった小寺で、泉龍寺の末寺。

地蔵尊は、別院建立の以前には泉龍寺の境内、山門に入って鐘樓の左手わきにまつられていましたが、元は龍法寺近くの辻に立っていて、辻斬りに襲われた人の身代わりになり、耳に刀傷を受けたといわれています。辻のあたりで追いはぎにあって逃げる拍子に片耳を斬られた人がいて、斬られたと思ったのに自分の耳は無事で、傍らの地蔵の耳に刀傷があったということです。このような身代わり伝説から、危難を救ってくれるお地蔵さんとして信心され、また、耳を斬られたことから、とくに耳の病に御利益があるともいわれていました。耳病治癒の願かけには、ひと節の竹筒に入れた酒と穴あき石などを供えたものです。

この地蔵伝説には異説もあって、遊び場所でけんかをして耳を斬られた酒飲みの道楽者のために、造られたといえます。また、龍法寺が廃寺になったため泉龍寺に移したところ、妖怪変化があらわれて廃寺の前を通る人をおびやかしたので、ある人がその妖怪に斬りつけて何故このようなことをするのかと問うと、元のところ（龍法寺のあったところ）に戻りたいと言ったということです。

〔付〕念仏供養を目的として造立された地蔵尊も多くみられ、念仏講中などによる市内最古の地蔵尊は、岩戸南の明静院にある貞享4年（1687）の舟型光背の浮彫り立像で、「念仏供養同行九人」による造立（現在、山門前向かって右手に安置）。泉龍寺境内に見られる元禄元年（1688）の浮彫り立像の地蔵尊は、「泉村同行三十四人」による「念仏講供養」のための造立となっています。

II 慶岸寺の塩地蔵—路傍から寺へ

岩戸北の慶岸寺の境内、本堂の南に、塩地蔵、塩なめ地蔵などとよばれる地蔵尊がまつられています。「地蔵さまの小屋」といっている覆屋の中に、セメントで補修した丸彫り立像を中央に据え、台座を残してほとんど全容の失われた1基と、とろけたような形の丈の低い1基

が、安置されています。現在、塩地蔵のご本体とされているのは、中央の像で、これらの像は、かつては世田谷通りの二の橋近く、稲毛屋（魚屋）さんの旧店舗の西のあたりにあった辻の地蔵でしたが、昭和10年代の初めに道路の拡幅によって慶岸寺境内に移されました。住職と近くに住む檀家の方が、リヤカーにのせて運んだそうです。その折に、損傷した像の補修も行われたということです。

この地蔵尊は元は、岩戸村の名主でもあった須田家とかかわりのある地蔵という言い伝えもありますが、村持ちの地蔵か、ともいわれています。「北の寺」とよばれていた慶岸寺への遷座にあたっては、「南の寺」の明静院住職をはじめ岩戸の有志の人たちが協賛者として名を連ねていました。現在の覆屋は昭和40年、檀家の一人の寄進による改築で、「塩地蔵菩薩」と墨書した木札が掛かっています。

塩地蔵は、安産や子育てに御利益があるといわれ、また、いぼを治す地蔵として、遠方からの参詣もみられました。願をかけるとお礼に塩をあげるので、塩地蔵、塩なめ地蔵などと呼ばれてきました。「元はお地蔵さんのかっこうがあったのに、あんまりお塩をあげたので、からだが崩れてしまった」ということです。歯痛のときにもお願いすることもありました。供えてある塩をいただいてきて、そのひとつまみを入れた風呂にはいると風邪をひかないともいわれていました。磨滅がいちじるしく、造立年代なども不詳ですが幾度か造りかえられ、江戸時代から信仰をあつめてきた地蔵尊と思われる。

三吉朋十著『武蔵野の地蔵尊 都内編』（昭和47年刊）には、慶岸寺の塩地蔵の項もあって、いぼ地蔵としてとりあげられています。

〔付〕慶岸寺の境内、本堂の東に、かつては地蔵堂がありました。明治20年代生まれの人が子どものころに、境内で遊んだときには、お堂があったそうです。『新編武蔵風土記稿』（文政11年<1828>完成）にも、その地蔵堂について、「客殿の東にあり、二間に一尺、西向、本尊地蔵は木の坐像一尺八寸厨子入りにて彩色を施せり」と記されています。この地蔵像は延命地蔵とされ、左手に小児を抱いているところから、現在は慶岸寺幼稚園に安置されています。

なお、江戸時代後期作と思われる地蔵立像が本堂にまつられています。

Ⅲ 六地蔵

寺の境内や墓地の入口などに見られる六地蔵尊は、六道を輪廻転生する衆生を地蔵が救済するということから、六体の分身をかたどって六地蔵として信仰するもので、その持物、印相（手指の構え）による像形の違いも、それぞれにみとめられます。市内に現存する最古の六地蔵は、東和泉の玉泉寺にある元禄16年（1703）のもので（山門を入れて左手裏、丸彫り立像の背面に銘文のある像は5体、ともに頭部を欠く）、「猪方村女中念仏講」29人による造立と知られます。一方、当寺の墓地入口近くには、「経王供養塔」の台石に立つ地蔵尊を中央に据えた、やや新しい時代のものと思われる六地蔵が並んでいて、寺参りや墓参の途次などにお参りされています。

泉龍寺境内の中ほどに並んで、参詣の人々の目をひく六地蔵（回国供養のために造立された像容の大きい地蔵を中心に、左右に3体ずつ安置）は、宝暦6年（1756）の造立。丸彫り立像の像高は1m近くあり、市内の六地蔵の中では最も大きな地蔵像となっています。赤ん坊が弱かったりすると、この六地蔵さんにお参りして、丈夫に育つようにと心願をかけ、お礼に頭巾とか、よだれかけなどをあげたということです。

子育てに限らず、さまざまなことを、六地蔵さんにはお願いしたものでした。このほか造立年代が江戸時代のもので知られる六地蔵は、慶岸寺に見られる、岩戸村の女中念仏講による安永10年（1781）造立の丸彫り立像の6体。東野川の千手院には、寛政13年（1801）造立の六地蔵がありましたが、損傷がひどくなったため、平成2年、天皇即位を記念して檀徒有志などにより、新たに六地蔵を造立しました。（狛江市文化財専門委員 中島恵子）